

吹田市立博物館

博物館だより

NO. 10

SUITA CITY MUSEUM



狩野宗秀筆「南流寺扇面図」(神戸市立博物館蔵)

平成10年度特別展

『高山右近とその時代—北摂のキリシタン文化—』

平成10年4月29日（祝）～5月31日（日）

天正9年（1581）高槻において巡察師ヴァリニャーノを迎え、盛大な復活祭が行われました。高槻城主高山右近は領内に教会を建て、領民に熱心にキリスト教への改宗をすすめており、領民2万5千人のうち1万8千人がキリシタンであったとイエズス会年報には記されています。この復活祭はヴァリニャーノやフロイスを感嘆させるほど立派なものでした。このころの高槻はグレゴリオ聖歌が流れ、パイプオルガンの音色が響きわたり、まるでヨーロッパのキリスト教国のような風情があったのではないのでしょうか。

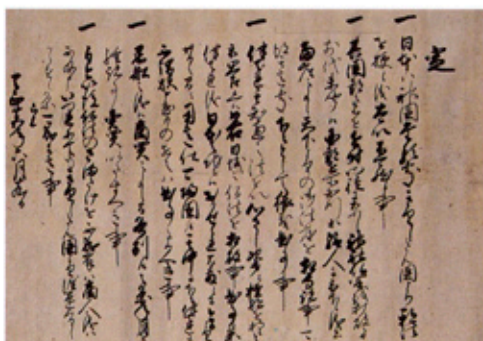
このように、高山右近は熱心なキリシタン大名として知られていますが、必ずしも真摯なキリシタンとしてのみ一生を送ったわけではありません。確かに豊臣秀吉や徳川家康の追放令を受け、信仰を捨てなかったことで、彼はキリスト教の立場からは高く評価されることになりました。しかし、彼にはキリシタンとしての面だけでなく戦国武将としての面があり、下剋上により成長した典型的な戦国武将の一人だったといえます。

右近は永禄7年（1564）父高山飛騨守のすすめに従い、洗礼を受けています。洗礼名はジュストで外国側資料にはジュスト右近殿（Justo Ucondono）と表記されています。右近自身の書状では重出、寿子、寿須などと書かれています。しかし、洗礼を受けた当時の右近はまだ12才頃で自分でキリスト教を信仰して入信したわけではなく、父の意向に従っただけと思われます。右近が入信した当時、飛騨守は松永久秀の配下に属し、大和国宇陀郡沢城主でした。その後、織田信長が入京し摂津を平定すると、久秀は信長の配下に入り、飛騨守・右近はこの時から信長の重臣・和田惟政に仕えました。惟政は熱心なキリシタン保護者で、高山父子のキリシタン布教の後ろ盾となりました。しかし、惟政が白井河原の合戦で荒木村重に討たれると、飛騨守、



高山右近禁制（本山寺蔵）

右近は敵将荒木村重の協力を得て惟政の遺児和田惟長を倒し高槻城主となりました。この乗っ取り事件は主に背く行為であり、フロイスも右近の行動に疑問をもっていました。これは右近の下剋上の世の戦国武将としての一面を表わしているのではないのでしょうか。ただ、この戦いで右近は瀕死の重傷を負い、このころからキリスト教への信仰をより深めていったと思われます。



豊臣秀吉バテレン追放令（松浦史料博物館蔵）

こうして高槻城主となった右近が領民の布教活動につとめたことは冒頭で紹介したとおりです。また、右近は諸侯にも改宗をすすめ、蒲生氏郷、黒田孝高、細川ガラシャらが洗礼を受けるに至りました。本能寺で信長が倒れた後、右近は秀吉に仕えましたが、天正13年（1585）明石へ移封となりました。天正15年秀吉はバテレン追放令を発令し、布教活動に熱心でキリシタン大名の中心人物であった右近を追放しま

した。一年後前田利家のとりなしで加賀へひきとられました。前田家の許しを得て加賀においても熱心な布教活動が続けました。しかし、徳川家康のキリシタン禁止政策によって、慶長19年（1614）国外退去の命を受け、マニラに赴き、まもなく亡くなりました。秀吉や家康がキリシタンを禁止したのは、いろいろ理由がありますが、根本的には神ゼウスを主と仰ぐキリスト教の教えが秀吉、家康を頂点とする支配体制と矛盾するものであったからでしょう。

大正9年（1920）2月、故藤波大超氏によって千提寺のクリス山から慶長8年（1603）の年紀をもつキリシタン墓碑が発見されました。これが端緒となり、千提寺の東家の「あけずのひつ」からフランシスコ・ザビエル画像などキリシタン遺物が確認されました。このザビエル画像は歴史の教科書などに掲載され、よく知られています。この画像は、元和8年（1622）にザビエルが列聖された後に、日本人画家の手によって描かれたものと考えられています。その後も次々とキリシタン遺物が確認され、高山右近の旧領地に隠れキリシタンが代々信仰を伝えていたことがわかったのです。

今回の展示では、キリシタン信仰を貫いた戦国武将高山右近をとりあげ、北摂でのキリスト教の布教から弾圧に至る経過や北摂の武将の動向を追い、北摂のキリシタン文化について紹介します。



フランシスコ・ザビエル画像（神戸市立博物館蔵）

—常設展示資料より—

早田家文書「宗旨帳」

第1展示室の「近世の吹田」コーナーには、江戸時代の吹田地域の古文書が数点展示されています。土地台帳である「検地帳」や、年貢をどれだけ納めるようにと領主から村へ通知した「年貢免状」など、江戸時代の村の様子を知ることができる古文書です。今回はそれらの史料の中から早田家文書「宗旨帳」についてご紹介しましょう。

江戸幕府のキリスト教禁止政策はよく知られていますが、キリシタンでない証拠に民衆はすべて仏教徒として寺院の下に統制されていました。この制度を寺請制度といい、寛文11年(1671)に宗門改が法制的に全国で整備されました。毎年村や町ごとに「宗門人別帳」を作成し、領主に提出することが義務付けられ、村や町にはその控えが残されました。「宗門人別帳」は「宗門改帳」、「宗門人別帳」や「宗旨帳」などの様々な名称でよばれ、家ごとに戸主を筆頭に家族・奉公人などの名前・年齢を記し、何宗の何という寺の檀家であるかが明記されています。

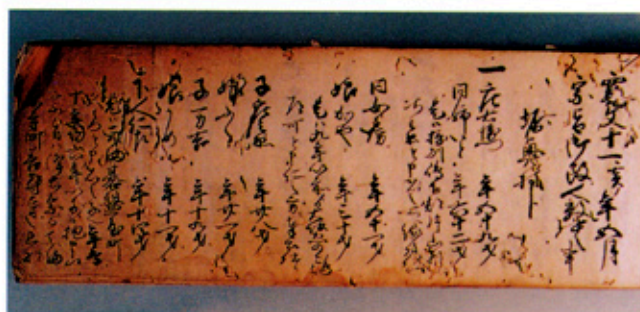
地域や時期によってその記載内容は異なりますが、何処から嫁してきたか、また何処へ嫁入りしたかというような記載から通婚圏を知ることができたり、奉公人の出入りなども窺うことができる貴重な史料です。また、その記載の性格から戸籍に代わる重要な書類として取り扱われたことから、近世史研究の人口史料としての価値も高く、江戸時代の村の実態を解明する史料としても注目されてきました。

早田家文書「宗旨帳」は、まさに宗門改が全国的に整備された寛文11年から記録されたものであり、吹田で最も古い時期の「宗門人別帳」といえるでしょう。横帳と呼ばれる横長の冊子に記録されていることも珍しく、特徴のひとつでもあります。寛文11年から享保18年(1733)までの半世紀以上にわたる記載ではありますが、残念ながら欠落した年次も多く、天和3年(1683)より後の記録は簡略化されており、名前・年齢のみが記されているだけです。吹田村の堀奥・宮ノ前地域のみの記載に限られていますので、当時の吹田村の全貌を明らかにするのは不可能ですが、寛文11年の堀奥地域の記事から当時の通婚圏や奉公人の出身地などについて少し考察してみたいと思います。



早田家文書「宗旨帳」(表紙)

まず、当時の堀奥の家数は18軒で、奉公人を含めた総人数85人中（この数字は他所への奉公人も含んでいます）男44人、女41人であることがわかります。ちなみに吹田村の全人口は元禄12年（1699）の段階で、1386人中男715人、女671人という記述が同帳にみえています。この「宗旨帳」には他村へ嫁いだ女性も記載されていて、何処へ嫁入りしたかがわかります。10人の嫁ぎ先は吹田村内が3名、嶋下郡内（片山村・岸部村）2名、大坂4名、伏見へ1名という内訳になっています。半数が大坂・伏見といった都市部へ嫁いでいることが注目され、江



寛文十一年亥ノ年五月
宗旨御改人数書之事
堀奥村分
一、庄右衛門 年五十九才
同姉いと 年六十二才
是八旗州嶋下郡片山村
次兵衛と申者之所へ縁付仕候
同女房 年五十一才
娘かや 年三十才
是八九年以前大坂系この嶋
道可と申仁之方奉公仕候
子庄兵衛 年廿八才
娘ふく 年廿一才
子万吉 年十九才
娘かめ 年十四才
下人仁左 年十四才
是八天満基盤屋町
久右衛門と申者之子也、年季
十年切六年以前抱申候、
宗旨八浄土宗、天満
東寺町善導寺之目那

戸時代の前期から大坂・京などと交流があったことを物語っています。つぎに、下人・下女といった奉公人の出身地や、また堀奥の人々の奉公先についてみたいと思います。奉公人は合計13名で、その出身地は吹田村1名、嶋下郡内（岸部村・泉原村〈現茨木市〉）2名、豊島郡内（垂水村）と西成郡内（北野村）が各1名、大坂1名、伏見3名、淀1名、あとは播磨国3名となっています。播磨国出身の3名はすべて茂兵衛家の奉公人で、全員多可郡であることから、茂兵衛家と播州多可郡との交流が窺われます。また、茂兵衛家は堀奥の奉公人の半数を超える8名を抱えており、何らかの家業を営んでいたことが推測できます。当地からの奉公先については、女性6名中吹田村内3名、西成郡内（小松村〈現東淀川区〉）1名、大坂2名となっており、比較的近在への奉公が多いようですが、男性の奉公先は4名中それぞれ江戸、出雲（出稼ぎ）、堺、尼崎です。これらの動向から17世紀の後半には都市の経済発展と結び付き、吹田村からも都市部へ労働力を提供していたことがわかります。

以上のように、嫁入り先や奉公人出身地、または当地からの奉公先などをみていくと、大坂—京を結ぶ交通の大動脈であった淀川と当地の人々との交流圏とは、やはり深く関わっているように思われます。まさに伏見や大坂、また淀川筋の村々との交流は、吹田の地域的特色を色濃く表しているといえるでしょう。

＊市立博物館では史料保存のため、数か月ごとに展示替えをおこないますので、ご紹介した早田家文書「宗旨帳」を展示していない場合もありますのでご了承下さい。

吹田の愛宕信仰

吹田市立博物館では平成9年度特別陳列として、平成9年11月1日から11月30日まで『あかり一祭りとくらし』を開催し、日常のあかりのみならず、祭礼に用いられる「あかり」をとりあげました。そこで、今回はこうした祭礼の一つである吹田市内の愛宕社の祭礼を紹介します。

愛宕信仰は、京都市北西の山城と丹後の国境をなす愛宕山に鎮座し、火伏せの神とされる愛宕大権現に伴う信仰です。本地仏として勝軍地藏がまつられ、地藏信仰と習合し、近畿・山陰地方を中心に愛宕修験者によって信仰がもたらされました。愛宕社の祭祀は、火を伴う場合が多く、盆の終りの送り火と重なったり愛宕火と呼ばれ、愛宕山への献灯の意味で火を焚いたり、松明をともし火祭りであることが特徴となっています。

吹田市内においても愛宕の祭りは、南部の旧吹田地域を除くほぼ全域にみられます。そのうち、広芝町の愛宕講を除いては愛宕神を祀る小祠があり、建立の由来として原のように疫病退散の祈願として地藏を祀ったとするものもありますが、多くがかつて、村に火事が起こったため、火除けとして京都からお迎えしてきたと伝えています。そして、丘陵部においては小高い山に祀られ、

その山を愛宕山と称しています。特に山の谷（上山手）では、高所にモッコで土を運んで最も高い山を築いたとい

います。御神体は、不明な地域も多くありますが、地藏と称する石仏ないしは木造の地藏尊像である地域が多くみられます。

最も重要な祭祀は8月24日に行われる場合が多く、地藏盆と同一の日と



祠へ上る階段に吊られた提灯 山の谷(上山手)



参詣道の辻に張り渡された提灯 山田上

なっています。佐井寺では、アタゴボン（愛宕盆）と呼びますが、その他は特に意識した呼び方はなく、アタゴサンのお祭りといえます。この日の共通した祭り方は、ほとんどの祠が愛宕山や愛宕大権現、愛宕神社、地藏尊と書かれた提灯で飾られ、重ね餅、御神酒、野菜、果物、スルメ、お菓子などをお供えし、人々が参詣に訪れます。そして、供物は子供達に配られます。地藏盆の祭祀もほぼ同様ですが、地藏盆の場合、提灯は地藏尊と書かれたものだけであり、御詠歌が歌われる場合もあること、また、地藏は個人や隣組程度の比較的小さな集団によって祀られているのに対し、愛宕神は町や村といった地藏に比べ大きな単位で祀られているのがその違いといえます。また、地藏盆に対して愛宕の祭祀の独自性には、



各家を回る獅子舞の子供たち 広芝町

丘陵部の佐井寺、原、山の谷（上山手）では祠へ上がる参詣道の階段に各家から持ち寄った提灯を吊り並べ、山田上では参詣道の辻に愛宕の提灯を張り渡します。また、原では戦前までは子供が松明に火をつけて祠周辺を駆け回ったといわれ、片山では祠前に大松明を焚き、その火を小松明に移して各家へ持ち帰り、カマドの火にしたといえます。さらに山田上では祠前で千束柴が焚かれていたと伝承しており、そこには、能勢町、伊丹市、箕面市、池田市などの北摂山間部における愛宕火の特徴がうかがえます。

吹田市内の愛宕社一覧

村 落 名	山田上	佐井寺	下新田 (春日)	山の谷 (上山手)	原	片 山 ★	岸 部	垂 水 中之町	江 坂 寺 田	江 坂 ★	広 芝
祠 の 有 無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	無
祠の立地場所	高 所	高 所 愛宕山	神 社	高 所 愛宕山	高 所 愛宕山	高 所 愛宕山	神 社	平 地	平 地	高 所 愛宕山	×
御 神 体	石 仏				木 造 地藏像			愛宕の お札	木 造 地藏像		木 造 地藏像
祭 祀 の 名 称	アタゴ サン	アタゴ サン		アタゴ サン	アタゴ サン			アタゴ サン	アタゴ サン	アタゴ サン	アタゴ サン
祭 日	8 / 24	8 / 24	10 / 10 (神社の祭日)	8 / 24	8 / 24	8 / 24		8 / 15	8 / 24	8 / 25	8 / 24
関 連 史 料 出 典	宝暦9年 町下新田神社	元禄5年 寺社町帳		天保2年 算用帳	享和年建立 口 伝		元禄5年 寺社町帳	明治15年 記録帳	大正5年建立 口 伝		寛政元年 覚日記

★ 片山は、かつては朝日が丘町の高所に祀られていたが、現在は片山神社に合祀され、特別の祭祀も行われていない。

＊ 江坂は、かつて神社の東の小高い丘に祠があったが、現在祠はない。

一方、平地部の祭祀は、広芝町では祠がなく、愛宕講の講員が毎年輪番で地藏尊像やその他の道具を持ち回り、当番の家の座敷に祭壇を組んで地藏像を祀り、嫁の名が入った地藏尊の提灯を吊し、講員がお供えを持ってお参りに行き、飲み食いをして一晩明かし、お供えは子供達に配られます。また、昼間は子供たちの獅子舞が鉦を鳴らしながら「幸い、幸い、この獅子と申すは、伊勢しめて天照大神



のお使わしめの獅子なり。明日は天岩戸へ参らせ候う。」と唱えて各戸を訪問し、お小遣をもらいます。同様の獅子舞は江坂や江坂・寺田でも25日の早朝から行われます。

このように吹田の愛宕の祭祀は丘陵部と平地部で祭祀形態が異なることがわかります。つまり、平地部では、火祭りの要素はなく、祠を提灯で飾り、一部伊勢信仰との関連もみられるものの、子供が深く関わるなど地藏盆の特徴とされるものと共通点が多く、地藏盆の影響を強く受けていることがわかりますが、丘陵部では地藏盆の影響を受けながらも、火を意識した愛宕信仰独自の祭祀である愛宕火の姿が見てとれます。また、このような分布形態から愛宕信仰が山沿いの村々を伝播してきた様子もうかがえます。

講演会のご案内

- 5月10日（日）午後2時

テーマ「高山右近とその時代」

帝塚山学院院長 脇田 修氏

- 5月17日（日）午後2時

テーマ「桃山時代絵画にみるキリシタン」

神戸市立博物館学芸員 成澤 勝嗣氏

各講演会とも会場は吹田市立博物館2階講座室。聴講は無料で先着順（120名）、開場は1時30分です。

吹田市立博物館だより 第10号

平成10年3月31日発行

吹田市立博物館

564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL. (06) 338-5500 FAX. (06) 338-9886

■ 交通案内

JR 岸辺駅下車徒歩20分

J R吹田駅・阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆき

バス「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆき、摂津ふれあいの里

ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

阪急南千里駅からJR吹田ゆきバス②、③系統「佐井寺北」下車
徒歩10分

